

素敵な同棲

PN 生方冬馬

同棲の記念にグラスを買った二人。
ミカは素敵な同棲生活を夢見るが、現実
は全く違うものだった。

人
物

橋 沼 ミ カ (24) 会 社 員

前 田 尚 弥 (26) 会 社 員

○都内・セレクトショップ・店内

橋沼ミカ（24）と前田尚弥（26）が

顔を体を寄せ合って、商品を吟味している。見ている商品はグラス。

ミカ「これなんかどう？はなやかじゃない？

飾ったら映えると思う」

前田「うーん。もっと値段高くてもいいんじゃないかな。記念だしさ」

ミカ「そう？それじゃ、これとか……」

ミカ、ペアグラスを手取る。ライトにかざして見る。

前田「いいね。これにウイスキー淹れて乾杯したい」

ミカ「それ！いいじゃない。それじゃ、これにしよう」

ミカ、レジに持って行って会計をする。ラッピングしてもらう。

前田「ラッピングしてもらったの？」

ミカ「うん。同棲記念だもん。プレゼン
ト！」

ミカ、前田に微笑んで、紙バッグを手
に持ち、前田と腕を組んで見せから出
ていく。

○レジデンス品川・前田宅・居間（夜）

ミカ、ダイニングテーブルでペアグラ
スを並べている。前田、ウイスキーを
持ってきて座る。

前田「さっそくけど……。乾杯しようよ」

前田、ウイスキーの封を開ける。

ミカ「うん。これからよろしくお願いしま
す」

前田、ペアグラスにウイスキーを注
ぐ。前田とミカ、グラスを手にとって

乾杯。微笑み合う。

ミカ「うふふふ。これから楽しみ！」

前田「俺も。よろしくね」

○レジデンス品川・前田宅・居間（朝）

寝癖の前田が起きてくる。あくび。

ミカ、身支度を急いで整えている。バツグを掴んでいる。

前田、なにもないダイニングを見て。

前田「俺の飯は？」

ミカ「各自でつて話したじゃない。私は早いんだから、もう行くの！それじゃ」

ミカ、時計を確認して居間から出ていく。前田、いやそうな表情で見送る。

前田「飯を食うなっていうのかよ。くそっ」

○丸の内・英集社・オフィス

ミカ、忙しそうに仕事をしている。

LINEの着信を確認するミカ。

前田からのLINE「夕飯は筑前煮がいいな！よろしく！」頭を抱えるミカ。

ミカ「そんな手間のかかる料理を作れですって！今日は残業だって話したのに！」

ミカ、前田にLINE「今日は遅いから先に食べていて！冷蔵庫に残り物入っ

ているから！」ミカ、スマホを裏返す。パソコンを見つめて集中する。

○レジデンス品川・前田宅・居間（夜）

ミカ、疲れて帰ってくる。前田、ソファに座ってグラスでウイスキーを飲んでテレビを見ている。

ダイニングテーブルの上はコンビニ飯が散らかっている。

それをみてため息をつくミカ。

ミカ「食べたものは片付けてよ」

前田「いちいち細かいな」

ミカ、バッグを椅子において、寝室へ。前田はテレビを見て笑っている。着替えて戻ってきたミカ。のそのそとダイニングテーブルを片付ける。冷蔵庫を開けて、残り物を出す。座ってのそのそと食べる。前田、ミカの横に立って。

前田「ずるいんじゃない？」

ミカ「えっ？」

前田「俺、コンビニだったんだけど？」

ミカ「そうね……？」

前田「一人だけ料理食べてさ、俺にはなんにもなしって……。ずるいじゃん」

ミカ「え、でも……。冷蔵庫に入っているからってLINEしたじゃない……」

怪訝な表情で返答するミカ。

前田「あー、ミカはこれだからダメなんだ

よ。男に残り物食べさせるなんてさ、女失格じゃない。そう思わない？」

ミカ「そんなこと、ないと思うけど……？」

前田「同棲しているんだよ？女なんだから、男にしっかりと食べさせないなんて、女としてなさないでしょ」

ミカ、困惑して少し苦笑いしながら。

ミカ「今は令和でしょ。女も男もないじゃない。二人で生活しているんだし、どっちが料理しても……」

前田、大げさにため息をついて。

前田「今日は許すけど、今後はこんなことないようにね。俺の寛容さに甘えないでよ」

前田、ミカの額をコンと軽く叩く。前田、寝室に入っていく。ミカ、呆然と取り残される。

○レジデンス品川・前田宅・居間

ミカ、ダイニングテーブルでパソコンを前にしてため息。パソコン画面は家計簿。ミカ、室内を見渡す。高価なトレーニングマシンが鎮座している。

ミカ「尚弥がいくら高給取りだからって、こうも筋トレ用品買われちゃうと。プロテインだって高いし。ジムにも通ってるし」

ミカが悩んでいるとランニングウェアの前田が居間に入ってくる。汗をかいている。

ミカ「ねえ、尚弥。相談なんだけど」

前田「シャワー浴びたいんだけどさ」

ミカ「家計簿見てよ。尚弥の趣味の出費。多すぎない？」

前田、すごく嫌そうな顔をする。無言で居間を出ていく。

ミカ、頭を抱える

ミカ「ずっとこう、話し合いができない。私のお給料は生活費でかつかつなのに。尚弥は好き勝手……。これが同棲なの？」

○レジデンス品川・前田宅・ベッドルーム

（朝）

ミカと前田はベッドに寝ている。ミカの顔が赤い。咳き込む。前田、起き上がって嫌そうな顔。

前田「なに？風邪？」

ミカ「喉痛い……病院連れて行ってほしい……」

前田、ドアを開けて振り返らないまま
前田「風邪治ったら連絡して。ホテル泊まるから」

ミカ「尚弥、お願い……」

前田、出て行って無言でドアを閉める
ミカ、かろうじて身を起こしてベッド
サイドから体温計を出して測る。

体温計「一度。ミカ、泣きながらスマ
ホに手を伸ばす。

○レジデンス品川・前田宅・居間（夜）

居間は洋服などが散乱している。

埃も溜まっていて、全体に荒れている
印象。ミカと前田が嫌そうな顔をして
ダイニングテーブルを挟んで向かい合
っている。

前田はウイスキーとペアグラスの片方
を手に持っている。

前田「あのさ、家事もできないでなにしてた
の？こんな部屋で生活しろって？」

ミカ「あのね、風邪をこじらせて入院してた
のよ？家事なんてできるわけない。尚弥こ
そ、お見舞いにも来ないで！」

前田「感染したら困るだろうが。あ、ホテル代、請求するからな」

ミカ「なんで私が！尚弥が勝手に泊まったんでしょ！」

前田「お前が勝手に風邪引くからだろ、迷惑なんだよ」

ミカ「あのね、パートナーが苦しんでいるのに何もしないなんて、何考えているのよ」

前田「口答えするなよ。家事はお前の役割だろ。勝手に放りだして、俺の生活めちゃくちゃじゃん」

ミカ「私もフルタイムで働いているの！尚弥も家事してよ！掃除機くらい掛けられるでしょう！」

前田、ウイスキーをグラスに注ぐ。

煽る。

前田「俺に家事させようってのかよ！女がサボってんじやない！」

ミカ「昭和みたいなこと言わないで！二人の家庭なんだから、二人で協力しないと」

前田「あーあ、権利ばかり主張するんだから。やることやってから言えよな」

ミカ「私だって働いているの！仕事も料理も洗濯も掃除だってしている。あなた、筋トレしかしてないじゃない！」

前田「うるさい！女が口答えするな！黙って家事してろ！」

前田、グラスを投げつける。
頭をかばって避けるミカ。

ミカ「きゃっ！」

グラスは壁にあたって碎ける。

泣くミカ。

顔を真赤にしている前田。

前田、立ち上がって居間を出ていく。

前田「片付けておけよ！」

ミカの嗚咽が居間に響いていいる。

碎けたグラスからウイスキーが広がっている。

馬冬方生